秘義教話

エルサレムのキュリロス
藤遥　制作

第１講　サタンを捨てることと信仰の告白

1:0 新たに照らされた人々へ。朗読は、ペテロの第一の公同の手紙から。『身を慎み、目をさましていなさい』（第一ペテロ五・八）から、手紙の終わりまで。1:1 教会のまことの、慕わしい子供たちよ。わたしはずっと前から、この霊的な、天の秘義について、あなたがたに語りたいと願っていました。しかし、目で見ることは、耳で聞くことよりはるかに確かです。わたしはそれをよく知っていたので、いまの時を待っていました。あなたがたは、この経験によって、語られることを受け入れやすくなっているでしょう。そのあなたがたの手を引いて、この楽園のさらに明るく、さらに香り高い牧場へ導くためです。それに、あなたがたは、神聖な、いのちを与える洗礼にふさわしいとされました。それで、さらに神聖な秘義を受け入れることのできる者となったのです。ですから、これからは、さらに完全な教えの食卓を整えなければなりません。さあ、このことを詳しく教えましょう。洗礼のあの夕べに、あなたがたに示されたものを知ってもらうためです。1:2 あなたがたは、まず洗礼堂の前室に入りました。そして、西に向かって立ち、手を伸ばすように命じられるのを聞きました。そして、サタンがそこにいるかのように、サタンを捨てました。このことを知っておかなければなりません。この型は、古い歴史の中にあるのです。パロは、このうえなく残酷で冷酷な暴君でした。そのパロが、ヘブル人の、自由で高貴な民を苦しめていました。そのとき、神はモーセをお遣わしになりました。エジプト人のもとでの悪い奴隷の身から、彼らを導き出させるためです。そして、小羊の血が門柱に塗られました。滅ぼす者が、血のしるしのある家々を避けて通るためです。こうして、ヘブル人の民は、思いもよらないしかたで自由になりました。ところが、自由になった彼らを、敵は追いかけました。そして、彼らのために海が分かれるのを、思いもよらず目にしました。それでも敵は進み、彼らの足跡に足を重ねて行きました。するとたちまち水の底に沈み、紅海に呑み込まれました。1:3 さあ、古いものから新しいものへ、型から真実へと移りなさい。あちらでは、モーセが神からエジプトへ遣わされました。こちらでは、父がキリストを世にお遣わしになりました。あちらでは、苦しめられていた民をエジプトから導き出すためでした。こちらでは、世で罪に打ちひしがれている人々を、キリストが救い出してくださるためです。あちらでは、小羊の血が滅ぼす者を退けました。こちらでは、傷のない小羊イエス・キリストの血が、悪霊を追い払うものとなりました。あの暴君は、古いあの民を海まで追いかけました。あなたにも、この厚かましく恥知らずな、悪の張本人である悪霊が、救いの流れのきわまでついて来ました。あの暴君は海に沈みました。この悪霊も、救いの水の中で消え失せます。1:4 それでも、あなたは手を伸ばし、サタンがそこにいるかのように、こう言うように告げられます。「サタンよ、わたしはおまえを捨てる」と。なぜ西に向かって立つのかも話しておきたいと思います。話しておかなければならないからです。西は、目に見える闇の場所です。そして、あの者は闇であり、闇の中に力を持っています。そのため、あなたがたは象徴として西を見つめ、あの暗く陰鬱な支配者を捨てるのです。では、あなたがたは一人一人、立って何と言いましたか。「サタンよ、わたしはおまえを捨てる」。悪い、このうえなく冷酷な暴君であるおまえを。つまり、こう言ったのです。「わたしはもう、おまえの力を恐れない。キリストがその力を打ち砕いてくださったからだ。キリストは、わたしと共に血と肉にあずかってくださった。それによって死をもって死を滅ぼし、わたしがいつまでも奴隷の身に縛られないようにしてくださったのだ」。「わたしはおまえを捨てる」。人を欺く、このうえなく悪賢い蛇であるおまえを。「わたしはおまえを捨てる」。陰謀をめぐらし、友のふりをしてあらゆる不法を行い、わたしたちの先祖に背きを起こさせたおまえを。「サタンよ、わたしはおまえを捨てる」。あらゆる悪を造り、悪に手を貸すおまえを。1:5 次に、あなたは二つ目の言葉で、「また、おまえのすべての業を」と言うことを教わります。サタンの業とは、すべての罪のことです。その罪も、捨てなければなりません。ちょうど、暴君からのがれた人が、

きっとその武器からものがれているのと同じです。ですから、あらゆる種類の罪が、悪魔の業の中に数えられています。ただ、このことを知っておきなさい。あなたが言うことはすべて、とくにあの、このうえなく畏れ多い時に言うことは、神の書物に書き記されています。ですから、それに反することをすれば、あなたは違反者として裁かれます。こうして、あなたはサタンの業を捨てるのです。つまり、道理に反するすべての行いと思いを捨てるのです。1:6次に、あなたは「また、そのすべての華やかな催しを」と言います。悪魔の華やかな催しとは、芝居への熱狂、競馬、野獣狩りの見せ物、また、そのようなあらゆるむなしいもののことです。聖なる人は、それから解き放たれることを願って、神に言います。『わたしの目をほかにむけて、むなしいものを見させないでください』（詩篇一一九・三七）。芝居への熱狂を追い求めてはいけません。そこで見るのは、役者たちのみだらなふるまいです。辱めと、あらゆる恥ずべきことをもって演じられます。また、女のようになった男たちの、狂ったような踊りです。野獣狩りの見せ物で、野獣に身をさらす人々の狂気も、追い求めてはいけません。彼らは、みじめな腹を満足させるために、そうするのです。腹を食べ物で養おうとして、自分自身が、まことに、猛獣の腹を養う食べ物になってしまいます。正しく言えば、彼らは自分の神である腹のために、自分のいのちを崖から投げ出すようにして、一騎打ちをしているのです。競馬も避けなさい。狂った見せ物で、人の魂をまっさかさまに振り落とします。これらはみな、悪魔の華やかな催しだからです。1:7また、偶像の祭りで掛けられるものも、悪魔の華やかな催しに数えられます。それはときに肉であり、パンであり、ほかのそういうものです。ひどく汚れた悪霊たちへの呼び求めによって汚されたものです。というのは、聖餐のパンとぶどう酒は、拝むべき三位一体への聖なる呼び求めの前には、ただのパンとぶどう酒でした。しかし、呼び求めがなされると、パンはキリストのからだとなり、ぶどう酒はキリストの血となります。それと同じように、サタンの華やかな催しのそういう食べ物も、それ自体はただの食べ物です。しかし、悪霊たちへの呼び求めによって、汚れたものとなるのです。1:8その後、あなたは「また、おまえへのすべての礼拝を」と言います。悪魔への礼拝とは、偶像の宮でささげる祈りです。いのちのない偶像をあがめて行うことです。また、泉や川のそばで、灯をともしたり、香をたいたりすることです。ある人々は、夢や悪霊に欺かれて、そこへ出かけて行きました。からだの病の癒やしも見つかると思ったのです。また、そのたぐいのことです。ですから、それを追い求めてはいけません。鳥占い、占い、言葉による吉凶の占い、お守り、薄い板に刻んだまじないの文字、魔術、そのほかの悪い術。そのようなものはみな、悪魔への礼拝です。ですから、これらを避けなさい。サタンを捨て、キリストについた後で、もしこれらに屈するなら、あの暴君を前より過酷に味わうことになります。悪魔は、以前はあなたを身内のように扱い、つらい奴隷の身をゆるめていたのでしょう。しかしいまは、あなたにひどく怒っているのです。そして、あなたはキリストを失い、あの者を味わうことになります。ロトとその娘たちのことをわたしたちに語る古い歴史を、あなたは聞いたではありませんか。ロトは娘たちと共に救われました。山に着いたからです。しかし、その妻は塩の柱になったではありませんか。いつまでもさらし者として立ち、悪い選びと振り返ったことの記憶をとどめているのです。ですから、自分に気をつけなさい。すきに手をかけてから、またうしろを振り返ってはいけません。この世の生活の、塩辛い営みに戻ってはいけません。むしろ、山へ、イエス・キリストのもとへのがれなさい。キリストは、人手によらずに切り出された石で、世界をお満たしになった方です。1:9ですから、あなたがサタンを捨てるとき、あなたはサタンとの契約をことごとく破棄しています。黄泉との古い盟約を破棄しているのです。そのとき、神の楽園があなたに開かれます。神が東の方にお設けになった楽園です。わたしたちの始祖は、違反のために、そこから追放されたのでした。あなたが西から、光の場所である東へと向きを変えるのは、そのことの象徴です。そのとき、あなたはこう言うように告げられました。「わたしは父と、子と、聖霊と、悔い改めのただ一つの洗礼を信じます」。これらのことは、先の教話で、神の恵みが与えてくださったかぎり、詳しくあなたに話しました。1:10ですから、これらの言葉で身を固めて、身を慎みなさい。いま読まれたとおりです。『わたしたちの敵である悪魔が、ほえたける獅子のように、呑み込むべきものを求めて歩き回っている』からです（第一ペテロ五・八）。確かに、それより前の時代には、『死が力をふるって呑み込んだ』[1]のです。しかし、再生の聖なる洗いのときに、神が『すべての顔から涙を

ぬぐい』去ってくださいました（イザヤ二五・八）。あなたはもう嘆くことはありません。古い人を脱ぎ捨てたからです。むしろ、祭りを祝うのです。救いの衣であるイエス・キリストを着たからです。[1] これらのことは、外の間で行われました。神のみこころなら、次からの秘義の手ほどきで、わたしたちは至聖所に入ります。そのとき、そこで行われることが何の象徴であるかを知るでしょう。父なる神に、栄光と力と威光が、子と聖霊と共に、世々限りなくありますように。アーメン。

訳注

1 旧約のギリシア語訳による。ヘブル語本文では主が死を滅ぼす。

第2講　洗礼

2:0 洗礼について。朗読は、ローマ人への手紙から。『それとも、あなたがたは知らないのか。キリスト・イエスにあずかるバプテスマを受けたわたしたちは、彼の死にあずかるバプテスマを受けたのである』（ローマ六・三）から。『あなたがたは律法の下にあるのではなく、恵みの下にある』（ローマ六・一四）まで。2:1 毎日の秘義の手ほどきは、わたしたちの役に立ちます。それは、いっそう新しい教えです。いっそう新しい事柄を告げ知らせるからです。とくに、古さから新しさへと新しくされたあなたがたには、役に立ちます。ですから、昨日の秘義の手ほどきの続きを、ぜひともあなたがたに話さなければなりません。あなたがたが奥の間で行ったことが、何の象徴であったかを学んでもらうためです。2:2 あなたがたは、中に入るとすぐに、下着を脱ぎました。これは、古い人をその行いと一緒に脱ぎ捨てることの姿でした。脱いだあなたがたは、裸になりました。このことでも、十字架の上で裸にされたキリストに倣ったのです。キリストは、その裸によって、もろもろの支配と権威とを脱ぎ捨て、木の上で公然と凱旋なさいました。敵対する力は、あなたがたの肢体に潜んでいました。ですから、あなたがたは、もうあの古い下着を着ていてはいけません。わたしが言うのは、もちろん、この目に見える下着のことではありません。古い人のことです。情欲に迷って滅び行く古い人です。ひとたびそれを脱ぎ捨てた魂が、二度とそれを着ることがありませんように。むしろ、雅歌のキリストの花嫁のように、こう言いますように。『わたしはすでに下着を脱いだ、どうしてまた着られようか』（雅歌五・三）。なんと驚くべきことでしょう。あなたがたは、すべての人の目の前で裸でした。それでも、恥ずかしいとは思いませんでした。本当に、最初に造られたアダムの似姿を、身に帯びていたのです。アダムは楽園で裸でしたが、恥ずかしいとは思いませんでした。2:3 それから、脱いだあなたがたは、悪霊を退ける祈りをささげた油を、頭の髪の先から足の先まで塗られました。こうして、良いオリブであるイエス・キリストにあずかる者となったのです。あなたがたは、野生のオリブから切り取られて、良いオリブにつがれました。そして、本当のオリブの豊かな養分にあずかる者となったのです。ですから、悪霊を退ける祈りをささげたこの油は、キリストの豊かな養分にあずかることの象徴でした。敵対する働きのあらゆる痕跡を追い払うものだったのです。聖なる人々が息を吹きかけることと、神の御名への呼び求めは、このうえなく激しい炎のように、悪霊を焼き、追い払います。それと同じように、悪霊を退ける祈りをささげたこの油も、神への呼び求めと祈りによって、それほど大きな力を受けます。罪の痕跡を焼いて清めるだけでなく、悪い者の、目に見えないすべての力をも追い払うほどの力です。2:4 その後、あなたがたは、神聖な洗礼の聖なる池へと、手を引いて導かれました。キリストが、十字架から、目の前にあるあの墓へと移されたのと同じです。そして、一人一人が、父と、子と、聖霊の名を信じるかどうかを尋ねられました。あなたがたは、救いの告白をしました。そして、三度、水に沈み、また水から上がりました。ここでも、象徴によって、キリストの三日の葬りを示していたのです。わたしたちの救い主は、三日三晩、地の腹の中におられました。それと同じように、あなたがたも、最初に水から上がったとき、地の中のキリストの最初の昼に倣いました。そして、水に沈んだとき、その夜に倣ったのです。夜の中にいる人は、もう何も見えません。しかし、昼の中にいる人は、光の中で過ごします。それと同じように、あなたがたは、水に沈んだときには、夜の中にいるように何も見えませんでした。しかし、水から上がったときには、また昼の中にいたのです。あなたがたは、同じときに死に、また生まれました。あの救いの水は、あなたがたにとって墓となり、また母となったのです。ソロモンがほかの人々について言ったことは、あなたがたにも当てはまるでしょう。そこでは、こう言っています。『生るるに時があり、死ぬるに時があり』（伝道の書三・二）。しかし、あなたがたの場合は逆です。死ぬるに時があり、生るるに時があるのです。ただ一つの時が、その両方を生み出しました。あなたがたの誕生は、死と時

を同じくしたのです。2:5 なんと不思議な、思いもよらないことでしょう。わたしたちは、本当に死んだのではありません。本当に葬られたのでも、本当に十字架につけられてよみがえったのでもありません。倣うことは姿の上でのことですが、救いは真実のことなのです。キリストは、まことに十字架につけられ、まことに葬られ、本当によみがえられました。そして、これらすべてを、わたしたちに恵みとして与えてくださいました。わたしたちが、倣うことによってキリストの苦しみにあずかり、真実に救いを得るためです。なんとあふれるばかりの、人への愛でしょう。キリストは、汚れのない手と足に釘をお受けになり、痛みをお受けになりました。そして、わたしには、痛みも苦労もなしに、その痛みにあずからせることによって、救いを恵んでくださるのです。2:6 ですから、だれも、洗礼は罪の赦しと子とされることのためだけにある、と思ってはいけません。ヨハネの洗礼が、ただ罪の赦しを与えるだけのものであったように、です。むしろ、わたしたちは、はっきりと知っています。洗礼は、罪を清めるものであり、聖霊の賜物をもたらすものです。それと同じように、キリストの苦しみの写しでもあるのです。そのため、いま読まれたとおり、パウロも声をあげて言いました。『それとも、あなたがたは知らないのか。キリスト・イエスにあずかるバプテスマを受けたわたしたちは、彼の死にあずかるバプテスマを受けたのである。すなわち、わたしたちは、その死にあずかるバプテスマによって、彼と共に葬られたのである』（ローマ六・三〜四）。パウロがこう言ったのは、ある人々に向けてでした。洗礼は罪の赦しと子とされることをもたらす。しかし、キリストの本当の苦しみに、倣うことによってあずかることは含まない。そう考えていた人々です。2:7 キリストが耐え忍んでくださったことはすべて、わたしたちのため、わたしたちの救いのためでした。キリストはそれを、見せかけではなく、真実にお受けになりました。そして、わたしたちも、その苦しみにあずかる者となります。わたしたちがそのことを知るように、パウロは、きわめて正確に、声をあげて言いました。『もしわたしたちが、彼の死の様に共に植えられた者となったなら、さらに、彼の復活の様にもそうなるであろう』（ローマ六・五）。この『共に植えられた』という言葉も、実にふさわしいものです。まことのぶどうの木は、この場所に植えられました。ですから、わたしたちも、死の洗礼にあずかることによって、キリストと共に植えられた者となったのです。使徒の言葉に、よくよく注意を向けなさい。パウロは、「もしわたしたちが、死に共に植えられた者となったのなら」とは言いませんでした。『死の様に』と言ったのです。キリストの場合、死は本当の死でした。魂は、本当にからだから離れたのです。葬りも、本当の葬りでした。キリストの聖なるからだは、きれいな亜麻布に包まれたのです。キリストには、すべてのことが本当に起こりました。しかし、あなたがたの場合、死と苦しみは『様』ですが、救いは『様』ではありません。真実なのです。2:8 これらのことを十分に教えられたのですから、どうか、それを記憶にしっかりととどめておいてください。そうすれば、ふさわしくないわたしも、あなたがたについてこう言えるでしょう。『わたしはあなたがたを愛している。あなたがたが、いつもわたしを覚えていて、わたしがあなたがたに伝えた言伝えを守っているからである』（第一コリント一一・二）。神は、あなたがたを、死人の中から生かされた者として立たせてくださいました。その神は、あなたがたが新しいいのちに生きるようにしてくださることがおできになります。栄光と力とが、今も、また世々限りなく、神にありますように。アーメン。

第３講　塗油

3:0 塗油について。朗読は、ヨハネの第一の公同の手紙から。『あなたがたは神から油を注がれていて、すべてのことを知っている』（第一ヨハネ二・二〇）から。『その来臨に際して、わたしたちがみまえに恥じいることがない』（第一ヨハネ二・二八）まで。3:1 キリストにあずかる洗礼を受け、キリストを着たあなたがたは、神の御子と同じかたちになりました。神は、わたしたちを子とされることへとあらかじめ定め、キリストの栄光のからだと同じかたちにしてくださったからです。こうしてキリストにあずかる者となったのですから、あなたがたが油を注がれた者（キリスト）と呼ばれるのは当然です。神も、あなたがたについて、こうお語りになりました。『わが油そそがれた者たちにさわってはならない』（詩篇一〇五・一五）。あなたがたが油を注がれた者となったのは、聖霊の写しを受けたからです。あなたがたには、すべてのことが姿として行われました。あなたがたはキリストの姿だからです。キリストは、ヨルダン川で身を洗い、ご自分の神性の香りを水に分け与えて、水から上がられました。すると、聖霊が実体をもってキリストの上に降られました。似た方が、似た方の上にとどまられたのです。あなたがたにも同じように、聖なる水の池から上がったとき、塗油が与えられました。キリストに注がれたものの写しです。キリストに注がれたもの、それは聖霊です。幸いなイザヤも、その預言の中で、主の口を借りて、この聖霊についてこう言いました。『主の霊がわたしに臨んだ。主がわたしに油を注がれたからである。主は、貧しい者に福音を宣べ伝えるために、わたしをつかわされた』（イザヤ六一・一）。3:2 キリストは、人の手で、物質の油や香油を注がれたのではないからです。父が、キリストを全世界の救い主としてお立てになり、聖霊によって油をお注ぎになったのです。ペテロが言うとおりです。『神が聖霊によって油を注がれた、ナザレのイエス』（使徒一〇・三八）。預言者ダビデも、声をあげて言いました。『神よ、あなたの御座は世々限りなく続き、あなたの支配のつえは公平のつえである。あなたは義を愛し、不義を憎まれた。それゆえに、神、あなたの神は、喜びの油を、あなたのともがらにまさって、あなたに注がれた』（詩篇四五・六～七）。キリストは、本当に十字架につけられ、葬られ、よみがえられました。一方、あなたがたは、洗礼のとき、様において、キリストと共に十字架につけられ、共に葬られ、共によみがえります。そうするのにふさわしい者とされるのです。それと同じことが、塗油についても言えます。キリストは、目に見えない喜びの油を注がれました。つまり、聖霊です。聖霊は喜びの油と呼ばれます。霊的な喜びをもたらす方だからです。一方、あなたがたは、香油を塗られました。キリストと交わる者、キリストにあずかる者となったのです。3:3 しかし、その香油を、ただの香油だと思ってはいけません。聖餐のパンは、聖霊への呼び求めの後には、もうただのパンではなく、キリストのからだです。それと同じように、この聖なる香油も、呼び求めの後には、もうただの香油ではありません。いわば、ありふれたものでもありません。キリストの賜物であり、その神性の臨在によって、聖霊をもたらすものとなるのです。この香油は、象徴として、額に、また、あなたの感覚の器官に塗られます。目に見える香油によってからだが塗られ、聖なる、いのちを与える霊によって、魂が聖なるものとされるのです。3:4 まず、あなたがたは額に塗られました。最初の違反者である人が、どこへ行っても身に負っていた恥から、解き放たれるためです。また、顔おおいなしに、主の栄光を鏡に映すように見るためです。次に、耳に塗られました。神の秘義を聞く耳を受けるためです。この耳について、イザヤはこう言いました。『主はわたしに、聞く耳を加えてくださった』（イザヤ五〇・四）。主イエスも、福音書の中でこうお語りになりました。『耳のある者は聞くがよい』（マタイ一一・一五）。次に、鼻に塗られました。神の香油を感じ取って、こう言うためです。『わたしたちは、救われる者にとって、神に対するキリストのかおりである』（第二コリント二・一五）。その後、胸に塗られました。正義の胸当を着けて、悪魔の策略に対抗して立つためです。キリストは、洗礼を受け、聖霊が降られた

後で、出て行って、敵対する者をお打ち負かしになりました。それと同じように、あなたがたも、聖なる洗礼と秘義の塗油の後で、聖霊の武具を身に着けています。そして、敵対する力に対抗して立ちます。こう言って、その力を打ち負かすのです。『わたしを強くしてくださるキリストによって、何事でもすることができる』（ピリピ四・一三）。3:5 この聖なる塗油にふさわしい者とされたあなたがたは、キリスト者と呼ばれます。新しく生まれたことによって、その名をも真実なものとしているのです。この恵みにふさわしい者とされる前には、あなたがたは、この呼び名に、本当の意味ではふさわしくありませんでした。キリスト者となることへと、道を進んでいる途中だったのです。3:6 また、あなたがたは知っておかなければなりません。この塗油の象徴は、旧約の聖書にあるのです。モーセは、神の命令を兄弟に伝え、彼を大祭司に立てたとき、彼が水で身を洗った後で、油を注ぎました。すると、彼は油を注がれた者（キリスト）と呼ばれました。もちろん、型としての塗油によってです。同じように、大祭司も、ソロモンを王に立てるとき、ソロモンがギホンで身を洗った後で、油を注ぎました。しかし、こうしたことは、彼らには型として起こりました。あなたがたには、型としてではなく、本当に起こったのです。あなたがたは、聖霊によって、本当に油を塗られたからです。あなたがたの救いの初めはキリストです。キリストは本当に初穂であり、あなたがたはそのかたまりだからです。初穂が聖なるものであれば、その聖さがかたまりにも移ることは明らかです。3:7 この塗油を、しみのないまま守りなさい。それがあなたがたのうちにとどまるなら、すべてのことを教えてくれるからです。あなたがたは、いま、幸いなヨハネがそう言うのを聞きました。ヨハネは、この塗油について多くのことを深く語っていました。この聖なるものは、からだの霊的な守りであり、魂を救うものなのです。幸いなイザヤは、遠い昔に、これについて預言して、こう言いました。『主は、この山で、すべての国民のために祝宴を設けられる。彼らはぶどう酒を飲み、喜びを飲み、香油を塗る』[1]（イザヤ二五・六〜七）。イザヤは、ほかのところでも、教会を山と呼んでいます。たとえば、『終りの日に、主の山ははっきりと現れる』（イザヤ二・二）と言うときです。また、あなたが確信できるように、この香油を秘義のものとして語るイザヤの言葉を聞きなさい。『これらすべてを国民に渡せ。主の計画は、すべての国民に向けられているからである』[2]（イザヤ二五・七）。ですから、この聖なる香油を塗られたあなたがたは、それを、しみもきずもないまま、自分のうちに守りなさい。良い行いによって進歩し、あなたがたの救いの君であるキリスト・イエスに喜ばれる者となりなさい。栄光が世々限りなく、キリストにありますように。アーメン。

訳注

1 旧約のギリシア語訳による。日本語の聖書に香油の句はない。
2 旧約のギリシア語訳による。日本語の聖書にこの命令はない。

第４講　キリストのからだと血

4:0 キリストのからだと血について。朗読は、パウロのコリント人への手紙から。『わたしは、主から受けたことを、また、あなたがたに伝えたのである』（第一コリント一一・二三）以下。4:1 このパウロの教えだけでも、神の秘義について、あなたがたに確信を与えるのに十分です。あなたがたは、その秘義にふさわしい者とされて、キリストと一つのからだ、一つの血となったのです。いま読まれたとおり、パウロ自身が声をあげて、こう言ったからです。『わたしたちの主イエス・キリストは、渡される夜、パンを取り、感謝してこれをさき、ご自分の弟子たちに与えて言われた。「取って食べよ。これはわたしのからだである」。また、杯を取り、感謝して言われた。「取って飲め。これはわたしの血である」』（第一コリント一一・二三、マタイ二六・二六、二八）。主ご自身が、パンについて、はっきりとこうお語りになりました。『これはわたしのからだである』。ですから、だれが、このうえ、あえて疑うでしょうか。また、主ご自身が、確かなこととして、こうお語りになりました。『これはわたしの血である』。だれが、それでもためらって、これは主の血ではない、と言うでしょうか。4:2 主は、かつてガリラヤのカナで、水をぶどう酒にお変えになりました。ぶどう酒は、血に近いものです。それなら、ぶどう酒を血にお変えになる主は、信じるに足りない方でしょうか。主は、肉体の婚礼に招かれて、この不思議なわざをなさいました。まして、婚礼の客にご自分のからだと血を味わわせてくださったことを、言い表さずにいられるでしょうか。4:3 ですから、まったく確信して、キリストのからだと血として、これを受けましょう。パンの形で、あなたにからだが与えられ、ぶどう酒の形で、あなたに血が与えられるからです。それは、あなたが、キリストのからだと血を受けて、キリストと一つのからだ、一つの血となるためです。こうして、わたしたちは、キリストを宿す者ともなります。キリストのからだと血が、わたしたちの肢体に行き渡るからです。こうして、幸いなペテロの言うとおり、わたしたちは神の性質にあずかる者となるのです。4:4 かつてキリストは、ユダヤ人と語り合って、こうお語りになりました。『わたしの肉を食べず、また、わたしの血を飲まなければ、あなたがたの内に命はない』（ヨハネ六・五三）。彼らは、語られたことを霊的に聞かず、つまずいて、去って行きました。キリストが、自分たちに肉を食べるよう勧めておられる、と思ったのです。4:5 古い契約にも、供えのパンがありました。しかし、それは古い契約のものだったので、終わりを迎えました。新しい契約には、天のパンと救いの杯があり、魂とからだを聖なるものとします。パンがからだにふさわしいように、言（ことば）は魂にふさわしいからです。4:6 ですから、パンとぶどう酒を、ただのパンとぶどう酒だと思ってはいけません。主の宣言のとおり、それはキリストのからだと血だからです。感覚があなたにそう思わせても、信仰があなたを確かにするようにしなさい。味によって、このことを判断してはいけません。信仰によって、ためらわずに確信しなさい。あなたは、キリストのからだと血にふさわしい者とされたのです。4:7 幸いなダビデも、このことの意味を、あなたに説き明かしてくれます。こう言うのです。『あなたは、わたしを苦しめる者に向かい合って、わたしの前に食卓を設けられた』（詩篇二三・五）。これは、次のような意味です。あなたがおいでになる前、悪霊たちは、人々のために食卓を設けました。汚れ、けがされ、悪魔の力に満ちた食卓です。しかし、主よ、あなたがおいでになった後、『あなたは、わたしの前に食卓を設けられた』のです。人は神に向かって、『あなたは、わたしの前に食卓を設けられた』と言います。それは、秘義の、目に見えない食卓のほかに、何を指すでしょうか。神が『向かい合って』、つまり反対の側から、悪霊たちに対抗して、わたしたちのために設けてくださった食卓です。まことにもっともなことです。あの食卓は悪霊たちとの交わりをもたらし、この食卓は神との交わりをもたらすからです。『あなたは、わたしのこうべに油を注がれた』。神は、あなたのこうべに、つまり額に、油を塗ってくださいました。あなたが受けた神の印のためです。それは、あなたが印の彫り物とな

り、神に聖なる者となるためです。『また、あなたの杯は、このうえなく強いもののように、わたしを酔わせる』。ここで杯と呼ばれているのがわかるでしょう。それは、イエスが手に取り、感謝して、こうお語りになった杯です。『これは、罪のゆるしを得させるようにと、多くの人のために流すわたしの血である』（マタイ二六・二八）。4:8ですから、ソロモンも、この恵みをほのめかして、伝道の書の中でこう言います。『さあ、喜びをもってあなたのパンを食べよ』。これは霊的なパンのことです。『さあ』と言うのは、救いをもたらし、人を幸いにする招きのことです。『楽しい心をもってあなたのぶどう酒を飲め』。これは霊的なぶどう酒のことです。『あなたの頭に油が注がれるように』。ソロモンが、秘義の塗油もほのめかしているのが、わかりますか。『あなたの衣を常に白くせよ。主はあなたのわざをよみせられたからである』（伝道の書九・七～八）。あなたが恵みに近づく前は、あなたのわざは『空の空』（伝道の書一・二）だったからです。しかし、あなたは古い衣を脱ぎ、霊的に白い衣を着たのですから、常に白い衣をまとっていなければなりません。わたしは、あなたがいつも白い衣を身に着けていなければならない、と言っているのでは決してありません。そうではなく、まことに白く輝く衣を、まとっていなければならないのです。それは、あなたが、幸いなイザヤのように、こう言うためです。『わが魂は主にあって大いに喜ぶがよい。主がわたしに救の衣を着せ、喜びの上衣をまとわせたからである』（イザヤ六一・一〇）。4:9あなたは、これらのことを学び、確信しました。目に見えるパンは、味ではパンと感じられても、パンではなく、キリストのからだです。目に見えるぶどう酒は、味がそう言おうとしても、ぶどう酒ではなく、キリストの血です。ダビデが昔、このことについて、こう歌っていたことも学びました。『パンは人の心を強くし、油をもって顔をつややかにする』（詩篇一〇四・一五）。ですから、このパンを霊的なものとして受け、心を強くしなさい。そして、あなたの魂の顔をつややかにしなさい。どうか、あなたが、清い良心のうちに、その顔をおおいのないものとして保つことができますように。そして、主の栄光を鏡に映すように見つつ、栄光から栄光へと進んで行くことができますように。わたしたちの主キリスト・イエスにあって。誉れと力と栄光が、世々限りなく、主にありますように。アーメン。

第５講（1〜10節）　聖餐の礼拝

5:0 ペテロの公同の手紙から。『だから、すべての汚れ、あらゆる偽り、悪口を捨てて』（ヤコブ一・二一、第一ペテロ二・一）以下[1]。5:1 神の、人への愛によって、あなたがたは、これまでの集まりで、十分に聞きました。洗礼について、塗油について、また、キリストのからだと血を受けることについてです。いまは、その先へ進まなければなりません。今日は、あなたがたの益となる霊的な建物に、頂の飾りを載せて、これを仕上げるのです。5:2 さて、あなたがたは、執事が、祭司と、神の祭壇を囲む長老たちに、手を洗う水を渡すのを見ました。執事がそれを渡したのは、決して、からだの汚れのためではありません。そうではないのです。わたしたちは、そもそも、からだの汚れをつけたまま、教会に入ったのではないからです。手を洗うことは、あなたがたが、すべての罪と不法から清くなければならないことの象徴なのです。手は、行いの象徴だからです。ですから、言うまでもなく、手を洗うことで、わたしたちは、行いの清さと、とがめのなさを、ほのめかしているのです。あなたは、幸いなダビデが、まさにこのことの秘義を手ほどきして、こう言うのを聞かなかったでしょうか。『主よ、わたしは手を洗って、罪のないことを示し、あなたの祭壇をめぐります』（詩篇二六・六）。ですから、手を洗うことは、罪の責めを負わないことの象徴なのです。5:3 次に、執事が声をあげます。「互いに迎え合いなさい。互いにあいさつを交わしましょう」。この接吻を、町の広場で、ふつうの友人どうしが交わすものと同じだと思ってはいけません。この接吻は、そういうものではありません。魂と魂を混ぜ合わせ、魂に、あらゆる恨みを忘れさせるのです。ですから、接吻は、魂が混ざり合い、あらゆる恨みを追い払うことのしるしです。そのため、キリストはこうお語りになりました。『祭壇に供え物をささげようとする場合、兄弟が自分に対して何かうらみをいだいていることを、そこで思い出したなら、その供え物を祭壇に残しておき、まず行ってその兄弟と和解し、それから来て、供え物をささげることにしなさい』（マタイ五・二三〜二四）。ですから、接吻は和解であり、そのために、きよいものなのです。幸いなパウロが、ある箇所で、声をあげてこう言ったとおりです。『互に、きよい接吻をもってあいさつをかわしなさい』（第一コリント一六・二〇）。ペテロも、『愛の接吻をもって』と言いました（第一ペテロ五・一四）。5:4 その後、祭司が声をあげます。「心を上に」。本当に、あの、このうえなく畏るべき時には、心を上に、神に向けていなければなりません。下の地上に、地上の事柄に向けていてはならないのです。実のところ、祭司は、その時に、すべての人に命じているのです。暮らしの思い煩いと、家の心配を捨てて、人を愛される神に向かって、心を天に置くように、と。それから、あなたがたは答えます。「主に向けています」。こう言い表すことで、祭司の命令に同意するのです。しかし、口では「主に向けています」と言いながら、思いの中では暮らしの思い煩いに心を向けている。そのような人は、だれもそこにいてはいけません。神のことは、いつも思い起こしていなければなりません。しかし、人間の弱さのためにそれができないなら、せめてその時だけは、そう努めなければなりません。5:5 次に、祭司が言います。「主に感謝をささげましょう」。まことに、わたしたちは感謝をささげなければなりません。神は、ふさわしくないわたしたちを、これほど大きな恵みに招いてくださったからです。敵であったわたしたちを、和解させてくださったからです。子とされる霊にふさわしい者としてくださったからです。それから、あなたがたは言います。「それはふさわしく、正しいことです」。わたしたちは、感謝をささげるとき、ふさわしく正しいことを行っています。しかし、神は、正しいことではなく、正しさを超えることをなさいました。わたしたちに恵みを施し、これほど大きな善いものにふさわしい者としてくださったのです。5:6 その後、わたしたちは、天と地と海を、太陽と月を、星を思い起こします。理性のあるものもないものも、見えるものも見えないものも、すべての造られたものを思い起こします。御使たち、御使のかしらたち、力ある者たち、主権、支配、権威、位、多くの顔を持つケルビム

を思い起こします。実のところ、わたしたちは、ダビデのあの言葉を唱えているのです。『わたしと共に主をあがめよ』（詩篇三四・三）。わたしたちは、セラピムも思い起こします。イザヤが聖霊によって見たセラピムです。セラピムは神の御座の周りに立ち、二つの翼で顔をおおい、二つの翼で足をおおい、二つの翼で飛びながら、こう言っていました。『聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、万軍の主』（イザヤ六・三）。わたしたちが、セラピムから伝えられた、神をたたえるこの言葉を唱えるのは、そのためです。世を超えた軍勢と共に、賛美の歌にあずかる者となるためです。5:7それから、わたしたちは、この霊的な賛美の歌によって自分を聖なるものとしたうえで、人を愛される神に願い求めます。供えられているものの上に、聖霊を遣わしてくださるように。そして、パンをキリストのからだとし、ぶどう酒をキリストの血としてくださるように。聖霊が触れたものは、すべて必ず、聖なるものとされ、変えられるからです。5:8次に、霊的なささげ物、血を流さない礼拝が成し遂げられます。その後、わたしたちは、あのあがないのささげ物を前にして、神に願い求めます。諸教会に共通の平和のため、世界の安定のため、皇帝たちのため、兵士と同盟する者たちのためです。病の中にある人々のため、苦しめられている人々のためです。ひと言で言えば、助けを必要とするすべての人のために、わたしたちは皆で祈り、このささげ物をささげるのです。5:9それから、わたしたちは、先に眠りについた人々をも思い起こします。まず、族長たち、預言者たち、使徒たち、殉教者たちです。神が、その人々の祈りと執り成しによって、わたしたちの願いを受け入れてくださるためです。それから、先に眠りについた聖なる父たちと監督たち、また、わたしたちのうちで先に眠りについたすべての人のためにも祈ります。わたしたちは信じているのです。聖なる、このうえなく畏るべきささげ物が供えられているときに、願いをささげてもらう魂には、このうえなく大きな益がある、と。5:10このことを、たとえで、あなたがたに納得してもらいたいと思います。多くの人がこう言うのを、わたしは知っているからです。「罪を負ったまま、あるいは罪を負わずにこの世を去った魂が、祈りの中で思い起こされたとして、何の益を受けるのか」。では、ある王が、自分に背いた人々を追放したとしましょう。その後、その人々の身内の者たちが冠を編み、罰を受けている人々のために、それを王にささげたとします。王は、その人々の罰を和らげてやらないでしょうか。同じように、わたしたちも、眠りについた人々のために、たとえ彼らが罪人であっても、神に願いをささげます。そのとき、わたしたちは冠を編むのではありません。わたしたちの罪のためにほふられたキリストをささげるのです。そうして、彼らのためにも、わたしたちのためにも、人を愛される神をなだめるのです。

訳注

1 この一文は写本になく、後の編者が補ったもの。

第５講（11～23節）　主の祈りと拝領

5:11 その後、わたしたちは、救い主がご自分の弟子たちに伝えてくださった、あの祈りを唱えます。清い良心をもって神を父と呼び、こう言うのです。『天にいますわれらの父よ』（マタイ六・九）。ああ、神の、人へのなんと大きな愛でしょう。人々は神から離れ去り、このうえない悪に陥りました。その人々に、神は、悪を忘れて赦すことと、恵みにあずかることとを、これほどまでに与えてくださいました。神を父と呼ぶことさえできるほどにです。『天にいますわれらの父よ』。天とは、天に属する者の形をとっている人々のことでもあるでしょう。その人々のうちには、神が住み、歩んでおられます。5:12 『御名が聖とされますように』。神の名は、わたしたちが言っても言わなくても、本性によって聖なるものです。しかし、罪を犯す人々のうちでは、ときに汚されることがあります。『あなたがたのゆえに、わたしの名は常に異邦人の間で汚されている』（イザヤ五二・五、ローマ二・二四）と書いてあるとおりです。ですから、わたしたちは、神の名がわたしたちのうちで『聖とされる』ように祈るのです。神の名が、聖でなかったものから聖なるものになる、というのではありません。わたしたちが聖なるものとされ、聖さにふさわしいことを行うとき、神の名は、わたしたちのうちで聖なるものとなるのです。5:13 『御国がきますように』（マタイ六・一〇）。はばかることなく『御国がきますように』と言えるのは、清い魂です。パウロは『だから、罪が、あなたがたの死ぬべきからだを支配することがないようにしなさい』（ローマ六・一二）と言います。これを聞いて罪に支配させず、かえって行いと思いと言葉で自分を清めた人が、神に『御国がきますように』と言うからです。5:14 『みこころが天に行われるとおり、地にも行われますように』。神の、神聖で幸いな御使たちは、神のみこころを行っています。ダビデも、詩篇を歌ってこう言いました。『主をほめよ、そのすべての使たちよ、力ある勇士たちよ、そのみこころを行う者たちよ』（詩篇一〇三・二〇～二一）。ですから、あなたがこう祈るとき、実のところ、こう言っているのです。「主よ、御使たちのうちであなたのみこころが行われるように、地でも、わたしのうちで行われますように」。5:15 『わたしたちの、本質のためのパンを、きょうお与えください』[1]（マタイ六・一一）。このありふれたパンは、『本質のための』パンではありません。しかし、この聖なるパンは『本質のための』パンです。つまり、魂の本質のために定められたパンです。このパンは、腹にはいって、かわやに出されるのではありません。あなたの全体にゆきわたり、からだと魂の益となります。また、『きょう』とは、「日ごとに」という意味です。パウロも、『きょうというちに』（ヘブル三・一三）と言ったとおりです。5:16 『わたしたちも、わたしたちに負債のある者をゆるしているように、わたしたちの負債をもおゆるしください』（マタイ六・一二）。わたしたちには、多くの罪があるからです。わたしたちは、言葉でも思いでもあやまちを犯し、責められるべきことを数多く行っています。ヨハネも言うとおり、『もし、罪がないと言うなら、わたしたちは偽っている』（第一ヨハネ一・八）のです。そして、わたしたちは神と約束を結びます。わたしたちが隣人の負債を赦すように、わたしたちの罪を赦してくださいと願うのです。ですから、どのようなものと引き換えに、どのようなものを受けるのかを考えましょう。互いに赦し合うことを、ためらったり、先に延ばしたりしないようにしましょう。わたしたちに対して犯されるあやまちは、小さく、取るに足りず、たやすく片のつくものです。しかし、わたしたちが神に対して犯したものは大きく、ただ神の、人への愛を必要とするものです。ですから、気をつけなさい。あなたに対して犯されたのは、小さな取るに足りない罪です。その罪のために、このうえなく重い罪について、神からの赦しを自分で閉ざしてしまわないように。5:17 『主よ、わたしたちを試みの中に入らせないでください』（マタイ六・一三）。主は、わたしたちがまったく試みられないように祈れ、と教えておられるのでしょうか。では、ほかのところで、『試みを受けない人は、確かめられていない人である』[2]と言われているのは、どうしてでしょうか。ま

た、『わたしの兄弟たちよ。あなたがたが、いろいろな試みに会った場合、それをむしろ非常に喜ばしいことと思いなさい』（ヤコブ一・二）とも言われています。むしろ、試みの中に入るとは、試みに沈められることではないでしょうか。試みは、渡りにくい急流のようなものだからです。試みの中で沈められない人々は、急流を渡りきります。すぐれた泳ぎ手のように、まったく流れに押し流されないのです。そうでない人々は、入っていって沈められてしまいます。たとえばユダは、金銭欲の試みの中に入りましたが、泳ぎ渡れませんでした。沈められて、からだも霊も息が詰まって死にました。ペテロも、主を知らないと言う試みの中に入りました。しかし、入りはしましたが、沈められませんでした。雄々しく泳ぎ渡って、試みから救い出されたのです。また、ほかのところで、無事であった聖なる人々の合唱が、試みから救い出されたことを感謝しているのを聞きなさい。『神よ、あなたはわれらを試み、しろがねを練るように、われらを練られた。あなたはわれらを網にひきいれ、われらの背に苦しみを置き、人々にわれらの頭の上を乗り越えさせられた。われらは火の中、水の中を通った。そしてあなたは、われらを憩いに導き出された』（詩篇六六・一〇～一二）。この人々が、通り抜けて、刺し貫かれなかったことを、はばかることなく語っているのがわかるでしょう。『そしてあなたは、われらを憩いに導き出された』と言うのです。この人々が憩いに来るとは、試みから救い出されることです。5:18『悪しき者からお救いください』。もし『わたしたちを試みの中に入らせないでください』が、まったく試みられないことを表していたとします。それなら、主は『悪しき者からお救いください』とはおっしゃらなかったでしょう。悪しき者とは、敵対する悪霊です。わたしたちは、この悪霊から救い出されるように祈るのです。それから、祈りを終えると、あなたは「アーメン」と言います。「アーメン」とは「そうなりますように」という意味です。この言葉によって、神の教えてくださった祈りの言葉に、印を押すのです。5:19その後、祭司が言います。「聖なるものは聖なる人々に」。供えられているものは聖なるものです。聖霊が臨んだからです。あなたがたも聖なる人々です。聖霊にふさわしい者とされたからです。ですから、聖なるものは聖なる人々にふさわしいのです。それから、あなたがたは言います。「聖なるかたはただひとり、主はただひとり、イエス・キリストです」。本当に、聖なるかたはただひとりで、本性によって聖なるかただからです。わたしたちも聖なる者です。しかし、本性によってではなく、あずかることと、修練と、祈りによって聖なる者なのです。5:20その後、あなたがたは、詩篇を歌う人の声を聞きます。その人は、神聖な調べで、聖なる秘義にあずかるようにあなたがたを促し、こう歌います。『主の恵みふかきことを味わい知れ』（詩篇三四・八）。判断を、からだの喉にゆだねてはなりません。いいえ、ためらうことのない信仰にゆだねなさい。味わう人々は、パンとぶどう酒を味わうように命じられているのではないからです。写しであるキリストのからだと血を、味わうように命じられているのです。5:21ですから、近づくときには、手首をまっすぐに伸ばしたまま進み出てはなりません。指を開いたままでもいけません。王を迎えようとする右手のために、左手を玉座としなさい。そして、手のひらをくぼめて、キリストのからだを受け、「アーメン」と答えなさい。それから、聖なるからだに触れて、注意深く目を聖なるものとしたうえで、いただきなさい。そのからだから少しも失わないように、気をつけなさい。失ったものは、明らかに、あなたが自分のからだの一部を失ったようなものだからです。さあ、言ってみなさい。だれかがあなたに金の粉をくれたとしましょう。あなたは細心の注意を払ってそれを持ち、少しも失って損をしないように気をつけるのではありませんか。それならば、金や宝石よりも尊いものについては、なおいっそう注意して見張るのではありませんか。そのかけら一つも、あなたの手から落ちないようにです。5:22それから、キリストのからだにあずかった後、血の杯にも近づきなさい。手を差し伸べず、身をかがめなさい。そして、拝み、敬う姿勢で「アーメン」と言い、キリストの血もいただいて、聖なるものとされなさい。唇にまだ湿りが残っているうちに、それに手で触れ、目と額と、ほかの感覚の器官とを聖なるものとしなさい。それから、祈りを待ち、これほど大きな秘義にふさわしい者としてくださった神に、感謝をささげなさい。5:23これらの言伝えを、しみのないまま守りなさい。自分を、つまずきのないように保ちなさい。秘義にあずかることから、自分を引き離してはなりません。罪に汚れて、この聖なる霊的な秘義から自分を遠ざけてはなりません。『どうか、平和の神が、あなたがたを全くきよめてくださるように。また、わたしたちの主イエス・キリストの来臨のときに、あな

たがたのからだと魂と霊とを完全に守ってくださるように』（第一テサロニケ五・二三）。このキリストに、栄光と誉れと力とが、父と聖霊と共に、今もいつも、世々限りなくありますように。アーメン。

訳注

1 ふつう『日ごとの』と訳される語。キュリロスは語の成り立ちから解く。

2 この言葉は、このままの形では聖書に見当たらない。

秘義教話

2026年11月23日版

著者　エルサレムのキュリロス

制作　藤遥

発行　christian-classics-jp

公開　https://christian-classics-jp.github.io/site/cyril-mystagogical-catecheses/

原稿　https://github.com/christian-classics-jp/site/tree/master/books/cyril-mystagogical-catecheses

全文を、ギリシア語原文（Κατηχήσεις μυσταγωγικαί）からAIを使って翻訳しました。

訳文はCC0 1.0で公開しています。引用した聖書の本文は含みません。